

幻覚・妄想状態を呈する代表的な疾患といえば統合失調症だが、その他に解離性障害、薬物中毒、脳の器質的疾患などでも見られ、疾患によって幻覚妄想の内容に異なる特徴を持っており、画像検査、血液検査、尿検査などで鑑別できる薬物中毒や脳器質疾患と違い、統合失調症と解離性障害は客観的検査で鑑別しにくい上に治療方針が大きく異なるため、その診断が予後にも大きく影響する。本研究は統合失調症と解離性障害の幻覚・妄想症状の質的相違点を明らかにすることを目的とした。

解離性障害と統合失調症各 70 例に対し GAF、PSYRATS、PANSS と MUPS の数値化可能な項目を独立変数とし、t 検定で $p > 0.1$ となる変数を除外して残った変数を多重ロジスティック回帰分析し、この結果 $p < 0.05$ となった変数の調整オッズ比を考察した。なお本研究では匿名性保持に十分注意を払い、研究で得られたデータは記号化した上で集計、解析した。また MUPS の使用について開発者本人から許諾を得た。

血統妄想(誇大妄想)、妄想に没頭する、被害妄想、幻聴に没頭する、テレパシーの存在を信じる、幻聴の持続時間が長い、幻聴が頭の外部から聴こえる、の項目がより統合失調症に寄与し、幻聴の内容が患者の考えの反映である、聴こえている幻聴を錯覚だという自覚がある、幻聴が自分の考えである認識がある、幻視の存在、幻聴内容が記憶の再生である、幻聴に抵抗する事が可能の項目がより解離性障害に寄与しているという結果になった。PSYRATS の小項目、PANSS の小項目、総合尺度の合計点、総合点は T 検定で p 値が 0.1 以上で除外され、PSYRATS の合計点と GAF はどちらも 1 に近い値となっており、 $p < 0.05$ ではあるもののどちらかの疾患に大きく寄与しているとは言い難い結果となった。

結果より、幻覚妄想状態の重症度は統合失調症と解離性障害を鑑別する手立てにはなり難いこと、血統に関連した誇大妄想の存在が統合失調症に関連すること、幻聴は統合失調症と解離性障害にほぼ同等に認められること、幻視や幻触の存在は解離性障害に強く関連していることが示唆された。さらに幻聴の内容を考察すると、解離性障害では頭の内部から聞こえる幻聴を錯覚であると自身が理解しており、自身の考えを反映した内容が多く、幻聴に抵抗ができるという点で物事に対する洞察力が保たれる一方、統合失調症では頭の外部から幻聴が聴こえることが多く、錯覚ではないという確信を持ち、持続的な幻聴に没頭する傾向があることが示唆された。

本論文は統合失調症と解離性障害の幻覚妄想の鑑別において質的評価の有用性が示唆され、臨床的に大変意義のある情報を提示するものであり、学位を授与するに値すると判定した。